図書紹介

『長期停滞の資本主義』あたらしい福祉社会とベイシックインカム

四六判　二四四頁　大月書店
二〇一九年七月刊
二五〇〇円（税別）

本田浩邦　著

はじめに

著者本田浩邦（獨協大学教授）さんは、アメリカ経済の研究者で雑誌「世界」や「日本の科学者」などに論考を発表されている。本誌にも論文を連載された（一一五～一一六号）。数年前、村上市・大町文庫での学習会の折に瀬賀弘行医師が、「社会主義はまだ生きていますか」と本田さんに尋ね「定義を改めて生きています」が答えだった。その答えの内実が、この書だと今私は理解した。副題の〝新しい福祉社会とベイシックインカム〟は、長期停滞の資本主義に対する具体的な処方箋である。そのことが、二四四頁にわたり詳細にしかも文学的に説かれていて、読み飽きさせない。でも寝転んで読める代物ではなく、学術書である。

一　現状の見事な解明
―二重の危機

この書は、閉塞的な現状の根源を明らかにしている。「今日の長期停滞のもとでの経済問題を分析したうえで、代替的な経済政策のあり方を提示しよう」と「ニューディル型資本主義と呼ぶ、比較的高い賃金と社会福祉制度を柱とした日本やアメリカのシステムは、第二次世界大戦から戦後期にかけて構想され、その時代の複雑な社会的力関係を反映して形成された」。

ニューディル型資本主義は、キーワードであるが、この型では恵まれるのは三分の二に満たず、それ以外は「貧困の世代間連鎖が待ち受けている」。「こうした長期停滞のもとでの資本蓄積と所得分配、貧困の拡大と経済的排除の問題、これが今日の資本主義の危機の第一の側面」である。

そして危機の第二の側面は、次の通り。「大衆的な不満と怒りの矛先が、経済低迷の責任を最も負うべき保守派に対してではなく、むしろ中道、もしくは中道左派の政治勢力に向けられていることにも理由がある。この間の極右政治を押し上げたのは、まぎれもなく欧米、日本、その他でのリベラル右派や中道右派政権、あるいはEU（欧州連合）に対する諸国民の強い幻滅である。既存の保守やリベラルは、彼らにとってはエリートであり、特権階級であると映る」。

そして「自戒を込めて言うが、残念ながらリベラル派や左派はこ

うした社会的分裂の構図に対処する十分な処方箋を示してこなかった」と猛省のもと、以下のように構想する。第Ⅰ部　長期停滞下の資本主義経済　第1章　資本主義は今どのような段階にあるか？　第2章　長期停滞の経済学―論争の総括と経済政策　第3章　ポスト・ニューディル型経済システム　第Ⅱ部　日本経済とベイシックインカム　第4章　日本の長期停滞と賃金・社会保障　第5章　日本の財政と金融をどうするか　第6章　「ケアチェーン」とジェンダー　第7章　ベイシックインカム　第8章　現代農農論―ベイシックインカムによる地方再生。

補論1　モデリアーニの三角形

補論2　なぜ日本では消費税が社会保障のためにならないか？

補論3　フランク・ロイド・ライトの都市構想―小規模都市と農業の分散的融合。

引用文献は、9頁が英語、3頁半が日本語。書き下ろしは、第1・3・4・5章で2章以外はすべて多摩住民自治研究所発行「緑の風」に連載したものに加筆して本書になった。

二　理論的な考察―第Ⅰ部

第Ⅰ部は、現在の長期停滞の歴史的文脈を明らかにし、やや長いスパンで経済成長の変化を展望している。現在の経済成長率の低迷は、構造的で長期的であり、この理解は長期停滞が下位所得者の多くを排除する構図を評価するうえで重要であり、代替的な経済政策の焦点を合わすうえで不可欠である、というように論証する。

第1章では、今日の長期停滞の構図を大まかに説明し、経済成長の発展に付随した社会構造の変化を分析し、それにあたってはアメリカの社会学者の「社会関係資本」の研究とハーバーマスの理論に依拠している。

第2章で、アメリカの長期停滞論の論争を総括し、理論的な問題を整理し、第3章では、経済停滞を打開する経済政策のあり方を検討し、今日の社会的な潜在的生産能力をナショナルミニマムの安定的な供給に結びつける必要性を強調する。

第Ⅱ部は、日本経済を対象に、賃金と社会保障の現状と政策的論点を分析する。

第4章は、第一章の主題を日本経済に当てはめて、日本の賃金と社会保障の問題点を明らかにして、その伝統的な二重構造が、今日の長期停滞のもとで、より甚だしさを増しつつあり、社会保障制度の劣化も酷い状態である、と。

第5章は、日本の財政・金融政策について、第6章は、「ケアチェーン」という概念を用いて、社会保障制度にまつわるジェンダーの問題を考察。第7章は、それまで見た経済問題を打開する政策の柱と

して、ベイシックインカムを位置づけ、その機能を分析する。第8章は、そのベイシックインカムが、今日の日本の地方創生と称する地方リストラ政策に対する対抗軸として、どのような役割を果し得るかを考察して、さらに補論1・2・3で新鮮な論点を提供する。

ベイシックインカムとは、社会成員に無条件で支給される社会的給付であるが、その役割と実現可能性を明らかにしているのが、この書の大きな特徴であり功績であろう。

三「従わざる者、食うべからず」から「従わなくとも、食べられる」へ

約一世紀前に、ロシア革命が後進国に起こった。指導者レーニンが死去して権力を掌握したスターリンは、「従わざる者、食うべからず」の社会にした。今日でもそれに似た国や地域があるかもしれない。

二一世紀の今日、生産力の高度に発展した我が国が、ベイシックインカムを実現して、「従わざるが、食べていける」という社会にできないはずがない。そのことがどれほどの社会意識やその他多くの変化をもたらすだろうと想像すると楽しくなる。次にその一例を示そう。

第5章で、民主的な代替政策の可能性として、「現在の国の予算では、公共事業費は6兆円、地方交付税交付金は17兆円あって、さらにそれとは別に国庫支出金が15兆円あり、地方債が10兆円規模である。さらに軍事予算が5兆円以上ある。これらすべてを高等教育とケアに用いることは無論できないが、そのある程度の部分を用いただけでも、上記の政策は可能である。これによって国民生活の負担は大きく緩和され、さらに消費需要の拡大も見込めるであろう」と。

上記の政策とは、高等教育を無償化し、育児・介護を公的な制度に組み替えていくことで、約15兆円が必要と見られる。

また「ベイシックインカムはいわば目盛りのついた社会主義で、社会的合意によってその給付額を上げることが私的所有の制限を意味し、その給付に必要なかぎりで政府や自治体が生産を管理、あるいは生産手段を所有する。その意味で伝統的な社会主義が掲げてきた共同性に基づく社会という将来ヴィジョンに、具体的な目標とあり方を付与することも、ベイシックインカムの課題である」。

ベイシックインカムは、世界のあちこちで実験的に行われていて、研究が進んでいる。夢物語ではなく具体的な経済的裏付けをもった政策である。また未来社会への筋道を具体的に論証してもいる、この書の一読をおすすめしたい。

（よしだ　たけを・所員）